

広げよう人と人との「つながり」

青陵中学校 三年 岩根 伊佐

皆さんは、たくさんの人達とつながりを持って、生活していますよね。私もそうです。家族とのつながり、友達とのつながり、学校の先生やクラスの人、部活動の仲間。きっとたくさんの知り合いの顔が思い浮んでくると思います。でもこれまで全くつながりのなかった人たちと、「つながることができた。」そんな経験を私はこの夏にしました。

夏休みが始まる前、学校でボランティアの案内が配られました。久留米市の社会福祉協議会が主催するフードバンクと子ども食堂でのボランティア活動です。フードバンクとは、家庭や企業にある安全に食べられる食品を集めて、必要とする人や子ども食堂などに食品を提供する活動です。農林水産省によると、日本では食べられるのに捨ててしまう食品、つまり食品ロス是一年間でおよそ 500 万トンにのぼるそうです。そのような食品を子ども食堂の食事として提供することで、食品ロス問題と生活に困っている人たちの問題、両方に取り組むことができます。

小学校の社会科の授業で SDGS を学んだ時から、私は食料の自給率問題や食品ロス問題に関心があり、このボランティアに参加してみようと思いました。

いざ参加してみると中学生は私一人だけ、他の参加者は全員高校生。最初は緊張しました。しかし、協力して準備をし、和気あいあいとミーティングをしていく中で、いつの間にか打ち解けることができました。そしていよいよ子ども食堂開催日、子ども食堂には 20 人近くの子どもたちがきました。友だちと誘い合わせて来たり、通りすがりの子を誘ってきたり…。そんな様子を見て、私は子ども食堂が、以前考えていた「貧困家庭の子どもがくるところ」ではなく、誰でも気軽に参加できる場所なのだと気づきました。

子ども食堂を運営する方々と一緒に作ったおにぎりや豚汁を、私たちボランティアの学生たちも、子どもと一緒に食べ、外で水鉄砲をして遊びました。男の子たちは私をねらって総攻撃を仕掛けてきます。私も負けるものかと応戦します。子ども達はずぶぬれになって遊んだ後、満面の笑顔で帰っていきました。私は「自分も何かの役にたてればいいなあ…」という気持ちでボランティアに参加したのに、美味しくご飯を食べて、楽しく遊んで、高校生の友達まで作って帰ったのです。

あの日夢中になって一緒に遊んだ子どもたち。あの子たちにとって、「子ども食堂は食事を提供される場所」以上に大きな意味があると思います。気軽に立ち寄って大人がご飯を用意してくれて、「いっぱい食べんね」と声をかけてもらい、お腹いっぱい食べることができる。そして、年上のお兄さんやお姉さんが遊んでくれる。そんな場所は誰にとっても楽しくて、温かくて、嬉しい場所です。そして、その場所は、子どもたちだけでなく、参加した大人たち・学生たちも温かい気持ちになり、新しい「つながり」が持てたと実感できる空間だったのです。

また、その日、誰かによって寄付された食品が使われ、美味しくいただくことができた現実。そのことが、直接参加するという形ではなくとも、誰かを支えることができると私にしっかりと教えてくれました。見えない形で「子ども食堂と関わった人」との「つながり」をも感じられたのです。

私はボランティア活動を通して、お互いに助け合う楽しさ、知らない人とつながっていく嬉しさを体験しました。そしてこれからもまたこのような活動に積極的に参加して、また新しい「つながり」を広げていきたいです。皆さんもぜひ、新しい人と人との「つながり」を意識してみませんか。

「小さな一歩が、大きな変化を生む」、その可能性を信じています。